

患者の人権

静岡県 静岡県西遠女子学園中学校 3年

江間 弓華（えま ゆみか）

「病院は病気を治す所です。治療のために血液を使いたいのです…。」

私の兄や姉といっても通りそうな若い医師達が口にした言葉に、私は思わず息をのんだ。隣に座っている母の体が、ぴんっと固くなった。

病院が病気を治す所だということは当たり前のことで、誰もが痛みから逃れたい、健康になりたいと思って行く場所だということは幼稚園児でもわかっているだろう。だが、その時の私はその言葉を受け入れることができず、まるで死刑宣告のように感じた。

「骨髄異形性症候群」。祖母はこの病気と二十数年間闘ってきた。赤血球、白血球、血小板という血液細胞を作る工場である骨髄に何らかの理由で異常が起きたためにかかってしまう病気で、原因は不明とされている。高齢者に多く見られ、重症化すると、急性骨髄性白血病へと移行する場合も多いという。祖母は長い間、病気が進行するのではないかという不安と闘いながら生きてきた。決められた時間を守って薬を飲み、病院へ行き、体調によっては入院して輸血をしてもらう、という生活を二十数年間ずっと続けてきたのだ。

私が物心ついた時には病気だったはずの祖母だが、どんな時も明るく、何もかもテキパキとこなし、生きることを謳歌しているという言葉がぴったりの女性で、姉と私はそんな祖母のことが大好きだった。

その祖母が、体調の悪さを訴えたため病院へ連れていったところ、即入院となった。この時、祖母も私たちも「病気を治すため」の病院へ向かっており、病院も受け入れてくれた。だが、後になって母から聞いた話によると、救急外来の先生には、最悪の場合、余命三ヶ月と宣告されていたという。それでもまだ祖母にとっても私たちにとっても、病院は病気を治すところであり、希望を持って過ごしていた。

しかし、入院から二ヶ月が過ぎても、病状は安定せず、歩いてレストルームまで行っていたのが部屋の洗面台までも車いすを使うようになり、また明日ね、と振る手がみるみる白く、か細くなっていくのが不安でたまらなくなって、毎日のように祖母に会いに行った。

祖母の担当は二十代前半の笑顔の素敵な女性と、優しく語りかけてくれる男性医師で、専門的なことも分かりやすく説明してくれたため祖母も私たちも安心していられた。だが、輸血の回数が頻繁になり、輸血の単位が多くなってきて、

数値が上がらないどころか、すぐ下がってしまうということが続くようになってくると、先生との面談の後、母はすぐに病室に戻らなくなった。どんなに優しく、どんなに分かりやすく説明されても、行きつくところの話は、ひとつを示しているからだ。

「治る見込みのある患者さんに血液を使いたい。病院は病気を治す所なのです。」

原因不明で完治の見込みがない病気であることに加え、高齢であること、持病だけでなく、肺の機能まで弱ってきていること、そして、度重なる輸血や投薬でも状態が改善されないことなどから、祖母にこれ以上の治療は無意味であるばかりか、苦痛を与え続けるだけになる、それならば祖母は緩和ケアに治療の方向を変えた方が良く、そして祖母のために使っている血液を、治るべき人たちのために使いたい。

「正論だよ。病院はそう考えるよね。」

と、つぶやく母に返す言葉が見つからず、面談の後は涙の跡をごまかして病室へ戻るが続いた。

それでも祖母は生きようとしていた。痛いことも苦しいことも、恥ずかしいことも、

「迷惑かけて申し訳ないけど、ばあばは、

まだ生きていたんだよ。がんばるでね。」

と言って毎日を過ごしていた。生きようと頑張っている祖母に緩和ケアの話をするのは、その思いを断ち切ることになってしまう気がしてなかなか言い出せなかった。

医学的には死が目前であっても、生きたいと、生きようとしている患者に対しどこまで治療を続け、どこで治療の線引きをするのかを決めることの難しさを目の当たりにし、私は人の命を預かる医療の厳しさを身をもって感じた。そして、同時に避けられない医療の限界があることも。

健康で過ごせることは幸せなことだが、体や心に何かしらの症状が出て、病院にかかる時、もちろん病院では治すためにあらゆることをしてくれるだろう。結果、快方に向かえば言うことはないが、祖母のように生きたいと願っても今の医療ではかなえられない場合、治療を続けたいという患者の意思はどうなるのだろうか。死を目前にした（と医学的に扱われる）患者の人権はどこまで守られるべきなのだろう。誰に剥奪の権利があるのだろうか…。

私は将来、新薬の研究開発の道に進みたい。剥奪される人権を一つでもなくすために。